

## 横浜市緑区中川町産更新世植物化石について

大沢進<sup>※1</sup>・高野繁昭<sup>※2</sup>・増渕和夫<sup>※3</sup>・川崎市域の自然調査地質班<sup>※4</sup>

On the plant fossils from the Pleistocene in Nakagawa-Cho, Midori-Ku,  
Yokohama

Susumu OHSAWA, Shigeaki TAKANO, Kazuo MASUBUCHI and Geological part of  
Kawasaki Natural Research Group

### I はじめに

現在、横浜市緑区から港北区にかけて、港北ニュータウンの建設工事が行なわれている。これらの工事に伴ない多摩丘陵では、多くの露頭が出現しては消滅している。筆者らは、地質調査中に多くの地点から大型植物化石を得た。今回報告する緑区中川町の地点からは、下末吉期および、武蔵野期の植物化石を採集した。これらは、この時期の古環境復元に興味深い資料を提供するものである。

### II 地形・地質

調査露頭は、緑区中川町、早淵川の左岸に位置する。(図2)この付近は、下末吉面の分布の西端部にあたり、これよりさらに西側の地域は、おし沼砂礫層からなるT<sub>2</sub>面の分布域になる。また早淵川沿いには、武蔵野期の河岸段丘も発達している。露頭は、港北ニュータウン内の道路工事の際に、武蔵野面および下末吉面を掘削して作られたものである。

露頭のスケッチを図2に、植物化石産出層準の柱状図を図3に示す。露頭の中央および北側では、上総層群、王禅寺層の砂岩、泥岩互層を波食台性の平滑な不整合面をもって、下末吉層が覆っている。下末層は下半部が層厚50cmの細砂からなり、上半部は層厚50cmの植物遺体を多量に含むピートからなる(産出地点№4)。ピート中には、下末吉ローム層最下部の鍵層SP<sub>1</sub>(W)がある。SP<sub>1</sub>は層厚8cm程度で、最大粒径30mmの発泡の良い白石軽石である。下末吉層を覆って、層厚7mの下末吉ローム層が堆積し、この中に三色アイス軽石群「SP<sub>2</sub>(V)~SP<sub>8</sub>(P)」、親子軽石群「SP<sub>10</sub>(C)、SP<sub>11</sub>(D)」、Pm-1、小原台軽石(OP)が挟んでいる。

下末吉ローム層を覆って、武蔵野ローム層、立川ローム層(以下新期ローム層と呼ぶ)が堆積している。新期ローム層は、露頭中央では、下末吉ローム層を整合に覆っているが、北側や南側では、下末吉ローム層以下の地層を不整合に覆っている。北側では、一部不整合面が谷状となっており、この凹部に堆積したピート質シルト中から、植物化石が産出する(産出地点№3)。一方、南側では、上総層群を直接不整合に覆い、境界面上に武蔵野礫層が発達している。この礫層は、主にチャートの中礫から構成され、植物片を含んでいる。かつての早淵川が堆積した河岸段丘礫層と考える。また、不整合面上にピート質シルトの発達する部分があり、ここから植物化石を産出する。(産出地点№1)

※1 和光学園高等部

※2 法政大学・院

※3 川崎市青少年科学館

※4 秋葉知子、大橋信太郎、平岡照代、平岡正三郎、  
横山康孝、吉田多美枝

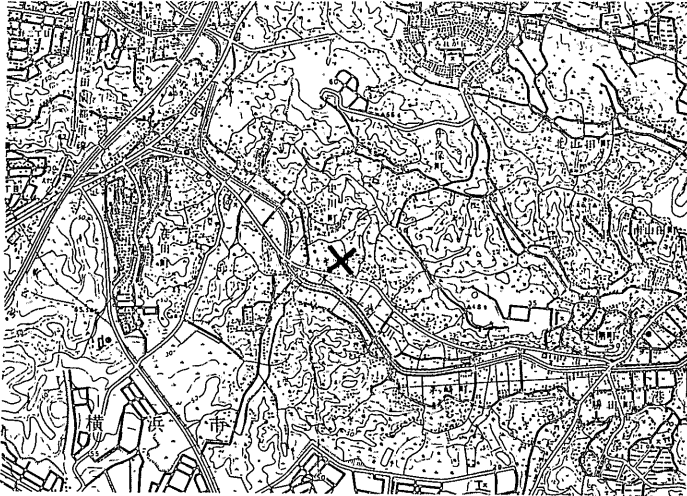
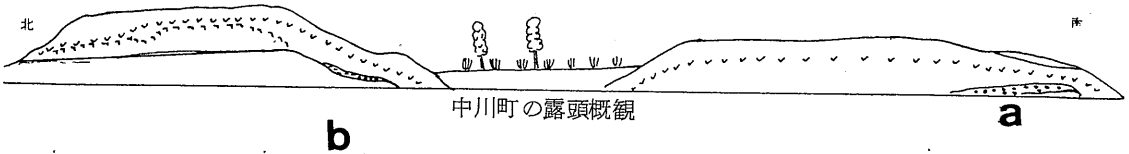


図1. 露頭位置図

この地図は国土地理院発行の2万5千分の1地形図(荏田)を使用したものである。



中川町の露頭概観

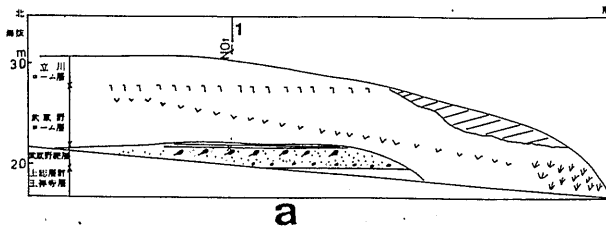
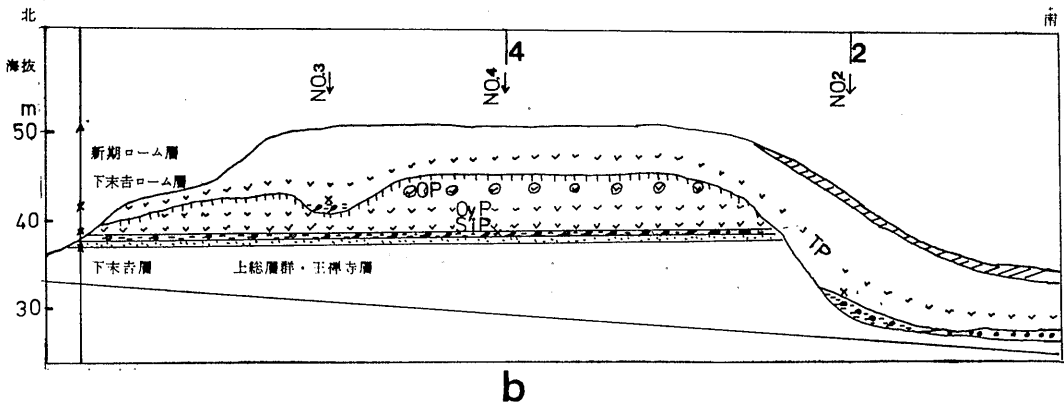


図2. 中川町露頭スケッチ

(露頭は、ほぼ南北に全長約500m)  
 上部の数字は、柱状図作成位置、  
 No.は、植物化石産出地点を示す。  
 凡例は、図3と同様



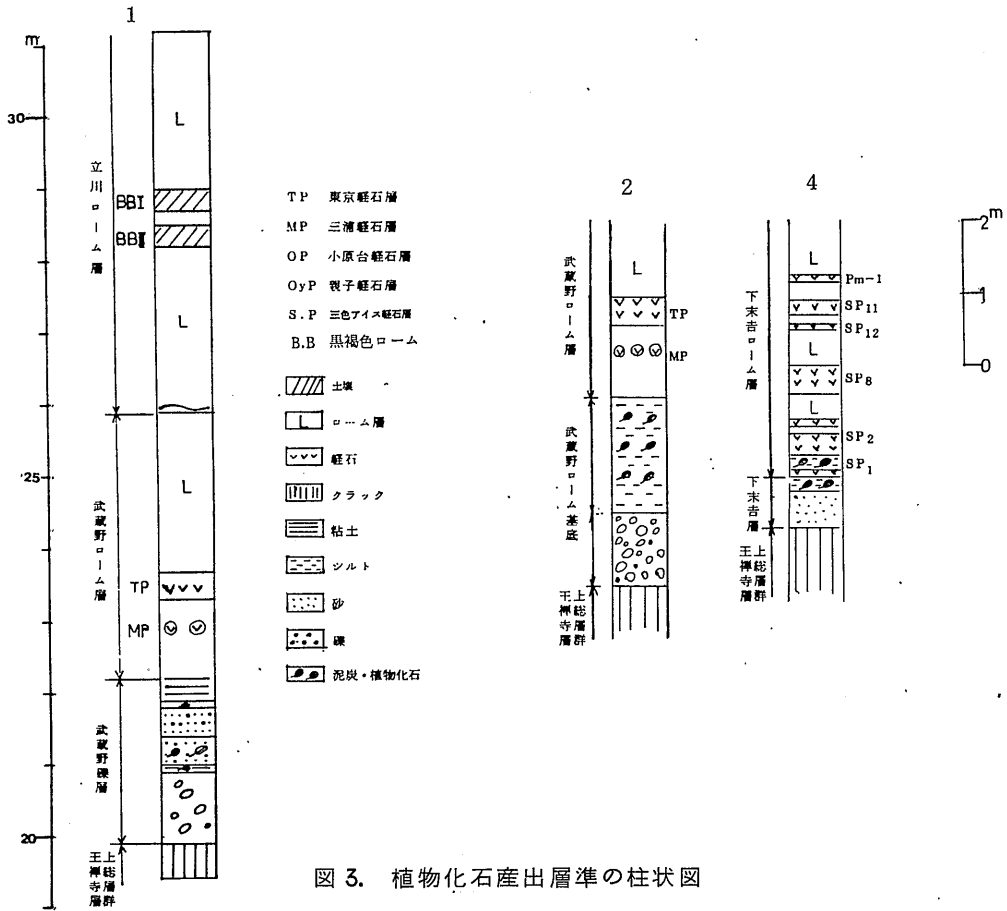


図 3. 植物化石産出層準の柱状図

### III 植物化石について

中川町産植物化石は、4地点2層準から得た。採取地別の植物化石リストを表1に示し、以下地点ごとに概略を記す。

#### №1

武蔵野礫層中およびその直上のビート質シルトないし砂質シルトから化石を得た。東京軽石層の下、2 m、三浦軽石層の層準よりも下位である。ここでは、トウヒ属の球果を3個体得た。保存が悪く種名は不明。広葉樹では、ハンノキ、エゴノキは普通に得られるが、コブシは稀である。

#### №2 武蔵野ローム層基底

上総層群を不整合に覆う武蔵野ローム層基底の堆積物から産する、王禪寺層のシルトブロックを多く含む砂質粘土からなる。トウヒ属の球果とたくきんの材の破片が含まれる。トウヒ属は、大型の球果でヒメバラモミではなく、まだ検討を要するので、ここではPicea sp. バラモミ節に含まれる種類である。

#### №3 武蔵野ローム層基底

武蔵野期の谷が北側から入っており、その谷頭の部分にあたる化石は、火山灰を多く含むシルトから産する。針葉樹を多産し、ほとんどがヒメバラモミの球果であり、葉も多く認められる。

№4

下末吉ローム層最下部のSP<sub>1</sub>(W)がピート層中に挟まれている。この上下から植物化石を多産し、とくに上部には、マツ属(二葉松亜属)の球果が密集している。エゴノキ、ハンノキは普通に産するが、オニグルミ、アブラギリは稀である。

IV まとめ

横浜市中川町から下末吉・武蔵野期の大形植物化石を得た。下末吉期の植物化石は、SP<sub>1</sub>(W)の時期のもので、マツ属、エゴノキ、ハンノキ、オニグルミ、アブラギリを採集した。

これらの植物化石は、アブラギリを除き暖温帯性の種ではなく、気候は現在とほぼ同程度であったと推定される。

武蔵野期の植物化石は、針葉樹のヒメバラモミ、トウヒ属を始め、広葉樹のハンノキ、エゴノキ、コブシなどである。広葉樹は、現在の多摩丘陵に分布する種であるが、ヒメバラモミなどはハツ岳などに分布する冷温帯上部のものである。現在よりやや冷涼な気候下にあったと考えられる。

ここでは、概略を報告したが、資料を蓄積していった上で、まとめる予定である。

産出地点	層 準	産 出 化 石	
№ 1	武 蔵 野 礫 層	エゴノキ	<i>Styrax japonica</i> Sieb. et Zucc. (エゴノキ科)
		コブシ	<i>Magnolia kobus</i> DC. (モクレン科)
		ハンノキ	<i>Alnus japonica</i> (Thunb.) Steud. (サバノキ科)
		トウヒ属	<i>Picea</i> sp. (マツ科)
№ 2	武蔵野ローム基底	トウヒ属	<i>Picea</i> sp. (マツ科)
№ 3	〃	ヒメバラモミ	<i>Picea maximowiczii</i> Regel (マツ科)
№ 4	下 末 吉 層	オニグルミ	<i>Juglans mandshurica</i> Maxim. subsp <i>sieboldiana</i> (Maxim) Kitamura (クルミ科)
		エゴノキ	<i>Styrax japonica</i> Sieb. et Zucc. (エゴノキ科)
		アブラギリ	<i>Aleurites cordata</i> (Thunb.) et Steudel (トウダイ グサ科)
		ハンノキ	<i>Alnus japonica</i> (Thunb.) Steud. (カバノキ科)
		マツ属	<i>Pinus</i> ( <i>Diploxylon</i> ) sp. (マツ科)

表 1

謝 辞

本調査を行うにあたり、住宅都市整備公団港北開発局、並びに榊都市企画の各々に、御協力を頂き、深謝に耐えない。都留文科大学正岡栄治先生には、多大なる助言と本原稿のご校閲を賜わり心から感謝します。